

新規就農者受け入れが近隣にも波及

福知山市 三和町梅原 地域支える担い手続々

「集落内に貸し出せる余った農地はありません」

——福知山市三和町梅原（戸数31）の現状だ。梅原で1999年から取り組ま

れた新規就農者の受け入れは、近隣の集落へも波及するなど、新たな段階を迎え、地域農業に明るい展望を拓（ひろ）いている。

新規参入の促進は、担い

手への農地の集積・集約化、遊休農地の発生防止・解消と並び、今後、進めるべき「農地利用の最適化」の柱。

梅原で新規就農者の受け入れのきっかけとなったのは、地区内の遊休化した水田の一回（1・8畝）を圃場整備し、新規就農者を受け入れようとする計画だった。

京都市出身の三崎要さん、暢子さん夫妻を地元農家が研修生として受け入

れ、地域と三和町（当時）

約40棟のハウス団地も誕生

も地域の担い手として応援していくこととした。

研修生4人が就農

三崎さん夫妻は99年4月、研修を開始。ハウスミズナと三和ナスを中心とした経営で2001年に独立。その後、台風災害や要さんの病氣などを克服しつつ、規模拡大を続け、今では紫ずきんや稲の育苗受託なども手がける梅原地区最大の農業者となった。

この間、三崎さんは08年、11年、13年、14年、16年と5人の研修生を受け入れ、うち4人は梅原と近隣の集落で就農している。三崎さ

かつて遊休農地だった

谷筋はハウス団地に

（三和町梅原）

んが就農するまでは、梅原にハウスはなかったが、現在では三崎さんのハウスを含め、約40棟のハウス団地が形成されている。

三崎さんは引き続き、研修生を受け入れていくため、法人化を検討しているが、梅原には空き農地がなく、他地域の農地を紹介しなければならぬのが現状だ。すでに就農者の受け入れを希望する集落も現れている。

「自分のところから巣立った就農者が、研修生を受け入れられるようになり、市内外を問わず担い手として独立していければ」と三崎さん。

福知山市では7月に農地利用最適化推進委員が配置される。中山間地域の担い手がいない地域では、移住対策と併せ、こうした新規就農者の育成と地域での受け入れが重要な業務として求められている。

18年前の取り組みが今、花開く



三崎要さん・暢子さん夫妻と研修生の福原さん（右）

